令和 2 年度第 7 回アーバンデザインセミナー実績報告書

1. 開催日時

令和 2 年 10 月 9 日（金）　18 時 00 分～19 時 30 分

参加人数: UDCBK での視聴：1 名、オンライン：27 名＝計 28 名

※オンライン会議システムと UDCBK のオープンスペースでの視聴を併用

2. テーマ

「歩いて暮らせるまちのつくり方」

- 本セミナーは、「『健やかなまち』を考える」を共通のテーマとした 3 回シリーズで開催されるセミナーの第 2 回目である。
- シリーズにおいては、新型コロナウイルス感染症の影響で生活スタイルが変化する中、草津市が目指す「健幸都市」について多角的な視点から考えることを目的としている。
- 第 2 回目の本セミナーでは、前年度のアーバンデザインスクール「3 ㎡からはじめるまちづくり」での学びを引き継ぎ、「高齢者が安心して歩いて暮らせるまち」へ向けて、都市空間に「やさしさ」や「憩い」を生み出すための実践方法（気運の醸成、体制づくり、継続的な仕組みなど）を考える。

3. 話題提供者

吉田 哲

- 京都大学大学院工学研究科建築学専攻 准教授

4. 話題の概要

(1) 吉田氏による講演

ア. ベンチ設置への課題と展望

（ア） 現在のまちと高齢者

- 都市に「にぎわい」を生み出し、「おしゃれ」で「都会的」なベンチは 2006 年の都市再生を契機に増えるようになっている。
- おしゃれな格好で元気にまちにやって来られる人というよりも、まちなかで「ふれあい」を生み出したり、高齢者の方が「ほっと一息」できたりするようなベンチをまちなかに増やせないかと、2008 年頃から商店街の人たちと考え始めた。
- 病気や加齢により歩くことが困難な高齢者にとっては、家から買い物や駅に行く、数百メートルを歩くのもしんどい。
- まちをよく観察してみると、心筋梗塞や脳梗塞の後遺症などによって、数分間しかつづけて歩けず道にへたりこんだり、立ったまま動けなくなってしまっている高齢者が実はたくさんいることに気付く。
- 元気な人は、そのように続けて歩くことが難しい高齢者がいることには気付きにくい。
- 買い物カートや道端のブロックに座っておしゃべりをしている高齢者は女性を中心にいるが、もっと安全にゆっくり座れる場所がないのかと感じていた。
- これは日本だけの問題ではなく、ヨーロッパ（英国）でもベンチが歩道にない場所は多く、高齢者は塀にもたれかかるなどして休んでいる。
- 実は、郊外・農村部は自動車の利用が多く、都市部の方の人の方がよく歩いている。それゆえ、郊外・農村部の方が健康上のリスク（認知症など）が高まるという調査研究結果もある。
- 別の調査では、車が入ってこられないような道の方がむしろ歩きやすいまちとなっており、高齢者も元気であるという。広い歩道を取れる道路は限られているので、このような車が通行しにくい道路を歩く人のために再整備していくということが建築や都市、まちづくりの世界では注目されている。
- 高齢者が自動車や自転車が運転できなくなった時、核家族化の進展によって近隣に子どもや親族がいない場合には、高齢者が日常に動ける距離はどんどんと狭くなっていってしまう。

（イ） 歩いて暮らせるまちと福祉

- 今後、ますます「徒歩圏内でいかに豊かな生活を持続できるか」ということが課題となる中、「エイジング・イン・プレイス（高齢期の地域継続居住: 吉田意訳）」の考え方が重要となる。
- そのためには、歩道を整備するとか、道路を平らにする（バリアフリー）といったこ

とだけではだめで、途中で座って休みながら歩き継げる道路をつくることが大事になる。また、目的地にだけ座るところがあるようでは、そこまで高齢者は出かけられない。

- 整備されたインフラがあるといわれる日本でも、そのような高齢者に向けた基本的なインフラが存在しない。
- 高齢者が日常に歩く道は限られているという知見を 10 年前の調査で得ており、その意味では、ベンチを無数に置かなくても問題は解決する可能性があることに気が付いた。
- 新型コロナウイルスによって生じた新しい日常生活において、住宅や住宅地の機能強化を図る必要が生じている今、このベンチの問題はより一層重要になってくる。
- シリーズ第 1 回のセミナーにおいて、高穂地域包括支援センターの方も話されていたように、高齢者にとって、この「歩いて目的地に行けない」ということは大きな問題となっている。
- 新型コロナウイルスの影響によって、外出が難しくなり、足腰が弱くなっている高齢者が増えているという報告もある。その結果、健康を損なう高齢者が 4 割いるという調査もある。
- 身近に歩いていける場所、歩くことができる道をつくることが大切である。これは、シリーズ第 1 回のセミナーにあった「休憩場所があれば、気兼ねなくちょっと座れる場所があれば」という高齢者の声にも通じるところである。
- さらに、シリーズ第 1 回のセミナーの長寿いきがい課の話にあった御坊市の郵便マークの例に引き付けると、認知症の人がいつも休むことのできるベンチがあれば、道に迷っても、そのベンチの場所で発見することができるのではないか。
- 福祉には分野横断的な取組が必要となるが、それを総合するものが「まちづくり」になってくるかもしれない。

イ. 伏見区（深草・藤森・藤城学区）でのベンチ設置の取組

（ア） 高齢者の住むまちとベンチ

- 2015 年から伏見区の深草・藤城・藤森学区（京阪電車と名神高速が交差し、南側には宇治川が通るエリア）にベンチが置けそうではないかと考え、取り組んでいる。
- 駅から歩いて 10 分から 15 分程の「閑静な住宅街」があり、元気な人であれば、問題なく暮らせる地域である。
- しかし、現在は、70 歳代、80 歳代の独居・夫婦のみの高齢者世帯も多く、また、京阪電車の駅や商店街までの間の道は高低差もあり、歩いて暮らすには大変なまちになっている。
- 市内の既に広い歩道がある場所や公園にはベンチが設置されている。また、お店の私有地でも設置を許可してくれる所有者もいる。しかし、住宅地の狭い歩道や車道上にはベンチが置けず、設置場所を考える必要がある。
- 住宅地では、高齢のために使われなくなった駐車スペース（家の軒先、軒の下等）などの活用を考えることもできる。
- 2007 年の道路法の一部の改正によって、商店街等にベンチを設置できるような道路（歩道）内の占用の特例ができた。
- ただし、ベンチを設置しようとしても歩道に 2m の余地を残して固定で設置しないといけないので、かなり広い歩道でないと難しい。
- 固定で設置するものは地域に広い歩道もないので難しく、私有地でできないかと考えた。
- 例えば、建築基準法 43 条 2 項道路では、通常は固定物が置けないが、近隣の同意が

得られて交通に不便がなければ、固定物でなければ私有地部分にベンチを設置することができるようにならないかと考えている（側溝の上など）。

- 見た目は同じように見える道路でも、私有地の場合もあれば、一部が里道になっているものもあり、私有地と公有地の区分の境界がどこにあるのかは場所、場所で異なるためよく調べてみる必要がある。
- 今後、人口減少が見込まれる中、自動車が通行するのに危険だからという理由だけで、ベンチを設置してはいけないという現状の法規制のままでよいのかどうか大いに考え直す必要がある。高齢者が歩けるようにベンチが設置できればというのが願い。

（イ） 深草学区での事例

- 2016 年、学区内を有志でウォーキングして、ベンチが置けそうなところ、置いてもらえそうなところを探す会を、車いすを置く練習会と一緒に行った。
- その内の何箇所かにはベンチを置かしてもらうことができるようになった。なお、現状では私有地が多い。
- 深草学区では、私道・里道の道路脇の私有地に、周辺住民合意の上でベンチが置けないかと考えている。
- ベンチ設置に当たっては、まず仲間を集める。誰かがやってくれるわけではない。
- 置いてくれそうな場所は、地元の人しか分からないので、地元の人たちの知恵・協力が必要になってくる。しかし、町内会だけでは中々、話が進まない。
- 良い話だと納得はされるが、自分の私有地ではなく、誰か他の人の私有地に置いてもらうことを念頭に置いた発言である。また、できない理由を述べる人も多い。
- また、昔のような議員への働きかけや役所への主張といったことでも全然進まない。
- 伏見区でまちづくりを市民参加で行おうという「ふしざく」という会に集まっていた人とベンチ設置の活動を進めた。
- 疏水沿いにベンチを設置することを一つのアイデアとして、まちづくり支援や越境まちづくり研究に関わりはじめた。その後ベンチ設置はこの場所では土木事務所、疏水事務所、みどり政策推進室に断られたので、疏水沿いの雑草刈り、ごみ拾いをする活動を進めた。
- その活動に徐々にいろいろな人が関わるようになってきた。例えば、高齢者の日常生活支援団体を運営している人や市のまちづくりアドバイザーなど。地域団体役員や地域住民ではない人たちから始まっていった。
- その中に、高齢者の居場所づくりを行っている地域に住む人もキーマンとして参加した。
- ベンチ設置の活動に参加するようになったことを機に、高齢者の日常生活支援団体の代表は、ベンチを置ける場所探し、勉強会などにも参加してくれるようになった。
- 深草商店街の関係者も参加するようになった。この商店街はもともと福祉や地域の

まちづくりで活発に活動しているが、このような人たちが参加することで、活動がさらに活発になっていった。

- 学区の社会福祉協議会の会長も試みに賛同して、参加してくれるようになった。
- 学区の人たちの参加が増えることで、地元内や近隣の高齢者が新しく参加するようになった。例えば、竹を活用した活動をしているNPOの協力で竹製のベンチを作り、NPO が補修する体制を構築したり、また、見守りをしている「おやじ会」の人が制作会に参加したり、小学校の総合学習で取り上げてもらったりするなど参加者が増えている。
- 深草の小学校の総合学習で制作していたベンチでは、小学生の手作りのマップも掲示してベンチの場所を周知している。
- 様々な機会を通じて広報することで、地元での認知も高まった。
- そのような活動が進んでくると、隣の学区（藤森・藤城学区）でのケア会議で同じようなことをしたりしようか、という機運になった。このようになると、ベンチを継続して制作・補修できるようになってくる可能性がある。また、まちを歩く高齢者との新しい関係を築くきっかけも増えてくる。
- いろいろな人が混じっている団体になってはじめてひとつのことができる。もともとの指揮命令系統がはっきりしている1つの組織でこれをしようとしてもなかなか始まらなかったかもしれない。
- デザインのされたベンチばかりをつくろうとするのではなく、それよりも大事なのは、座れるところが地域に増えること。深草では竹を活かしたベンチを制作している。
- 深草学区は、まちの外の高齢者がきっかけをつくった上で、地元NPOや有志、大学関係者が集まってきて手探りでいくつもの団体が合流していって、私有地連携により2〜3分ごとに歩き継ぐベンチをつくろうという「おでかけベンチ」の活動となった。

（ウ） 藤森・藤城学区での事例

- 藤森・藤城学区では、深草学区に参加した人によるケア会議での発案をきっかけとして、会議を中心に組織的な活動が行われている。小学校区の自治連合会、地域包括支援センター、社協の地域支え合い活動創出コーディネーターも参加し、「とまり木休憩所プロジェクト」として協力を求めている。
- ベンチを置いてもらえればうれしい場所（70 か所）をリストアップして、交渉に当たっている。
- 深草学区と藤森・藤城学区ではベンチ設置の進み方が異なる。藤森・藤城学区では、ベンチが高齢者の「居場所」になるのではないかという発想で、「とまり木休憩所プロジェクト」が始まった。
- リストにある場所ごとに実際に現場に行ってカルテ（現地確認シート）や「とまり木

交渉マニュアル」を作成している。

- どのようにしたらベンチを置いてもらえる場所が増えるかを考えている。ベンチを置いたら終わりではなく、置いた後の活動も併せてお知らせする。
- 「とまり木休憩所プロジェクトマップ」も作成して、ベンチの位置を一度リストアップしている。マッピングしてみると商店街などを中心にベンチが設置できてきていることが分かる。今後は駅や商店街から少し離れた住宅地にベンチを増やしていこうとしている。
- 現在は、お店や住宅にベンチを置いてもらえるような協力者を少しずつ増やして、つないでいっている。
- 「とまり木ベンチ」のプレートの案を出し合い、内容を考えていった。小学生にも子ども食堂などの機会にプレートをつくってもらうなど、プロジェクトに参加してもらった。

ウ. ベンチとまちづくり

（ア） ベンチ設置前後で大切なこと

- 活動のきっかとなるハブ ＝ きっかけと、地元の 2 つのハブ

  1. まずは、「よそもの」、「わかもの」、「ばかもの」と言われるような人が「きっかけ」をつくる。最後まで見通そうと思うと始まらない。しかし、それらの人は他にも活動は多く、最後まで継続しての参加とならないこともある。

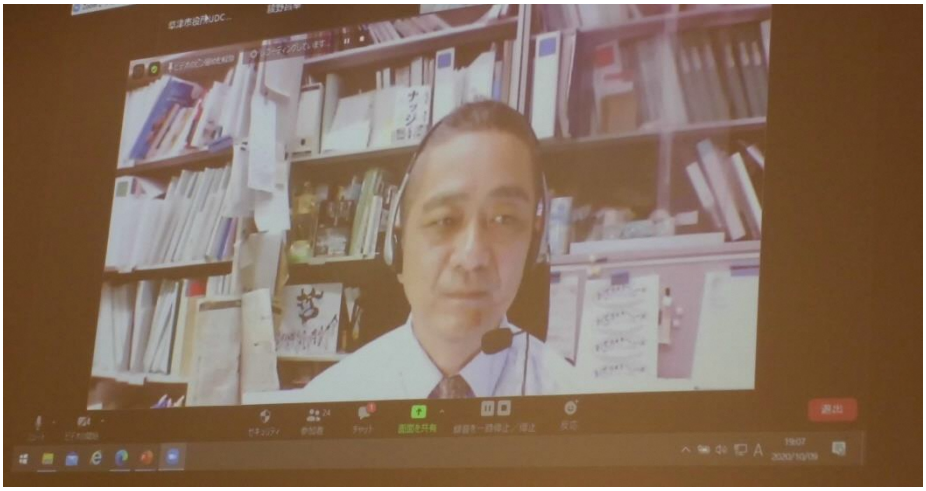
  2. きっかけがつくられたら、次は地元でいろいろな調整ができる人が活動の中心になる。例えば、福祉関係の会への声掛けや、ベンチ制作の現場に人を集めるなど、関係者のつなぎ役を務める。
- 地元の団体は今担当している事業、活動だけで手いっぱいであり、新しいことをする余裕がない。また、外部の専門家（大学）が提案しても、難しいと敬遠されてしまうことがある。
- まずは面白そうだと思って、活動を始めてくれる人がいないとまちづくりははじまっていかない。
- 学習会やベンチの制作会をすると、外部から来た人たち（よそもの）が混じっていることが多い。面白そうなことをやっていると集まってきてくれる。
- 制作の現場では配慮や準備（バーナーで竹をあぶるので音が出る、あぶない、場所はどうやって確保するか、誰が指導するかなど）が必要であり、地元の人の協力が欠かせない。
- 制作を楽しい場とすることで、通りがかりの人が見るようになり、活動を知ってもらうきっかけにもある。通りがかりの人が「ベンチを置いてもいいよ」と声をかけてくれることもある。
- ベンチのかたちを試行錯誤したり、お祭りやイベントにベンチを持って行って周知

宣伝したりするなど、週に 2，3 日続けて現地を訪れた時期もあった。

- ベンチを設置して数年たつと、劣化してくるベンチもあるので、防カビ・防腐処理対策も進めている。
- ベンチの代わりに、パイプ椅子を置いたり、ちょっとした石を置いて家の塀を背も足りにしたりなどする例もある。これでなくてはだめということではない。
- まちなかにベンチを設置してから、お年寄りが一休みする姿が増え、まちの風景になっている。風景込みのベンチができることが楽しい。
- 2020 年度までに合計で、深草学区では 15 台、藤森学区 18 台、藤城学区 8 台の設置が行われる予定である。

（イ） ベンチから広がるネットワーク、連携

- 自宅を出て 100 メートルのところにベンチがあれば、その先また 100 メートル歩いてもらうことができるかもしれない、という発想が必要である。
- 目的地型から経路沿道型に移行していく。線上から放射状にし、網の目=ネットワークを形成する。特に「最初の 100 メートル」が大切である。
- ベンチを置くだけなら、3 ㎡、もっと言えば、1 ㎡で足りる。
- ベンチを置くということもまちづくりであると気付いてほしい。これが、高齢者への一番の支援になる。
- 京都の三山のへりに住宅地があるが、そこから近くのお店や施設まで歩くことができるようにしたい。歩くことができるということは、途中ですわっていくことができるということである。
- ベンチを手掛かりに、さらに福祉の分野との連携ができないかと考えている。例えば、日常生活支援を隣接学区で相互補完ができないか（近所の知り合いに支援してもらうには抵抗のある人もいる）、高齢者施設や多世代食堂との連携ができないか、歴史的資産を活用して目的地（居場所づくり）ができないか、など。
- ベンチで隣近所の人が会話をすることで、認知症予防にもなるのではないかと考えている。将来的には、ベンチの場所に買物配達するということも構想している。
- ベンチがあると、行けるところが目に見えるネットワークになる。結果として、高齢になっても他者に頼らずに自立した暮らしを継続することができるようになる可能性もある。
- 自宅前にベンチが一つあれば、自宅前が座る場所のある道路の一本目となる。



5. 質疑応答

(1) Q: キーマンとなるような人にどのようにアプローチをすればよいか。

A: 福祉だからと言って、立派な考えを持って入ってきなさいと言ってしまうと参加が高いハードルになる。例えば、サロンであればコーヒーの淹れ方がうまい人はいますか、というように何かできることがあるかと聞いてみる。また、イベントなど「何か楽しそうだ」と感じてもらえるかが大切である。最初の動機は、いい加減なものでもよい。また、毎回行かないといけない、となると負担に思う人が出てくる。生活支援でも同じ学区内だと毎回となりそうで行きづらいが、隣の学区だと時々行けばよいと思えるので、気が楽になる。このように「時々行けばよい」という人を見つけてその人数を増やしていけば、総体として実質的に活動も回るようになるのではないかと考える。できることを、時々、多くの人に分けてやってもらうということが重要になる。少ない人を見つけてすべての責任を押し付けるような「分担」は「負担」であり、よくないと考える。

(2) Q: 歩いて楽しいまちづくりに必要な要素は何か。

A: 例えば歴史的なことをガイドの人の話を聞きながら歩くことが楽しいが、自分の出かけたいときに、出かけたいところへ買い物に行けることが高齢者にとっては何よりも楽しい。イベントを実施したり、にぎやかなこと、盛り上がることを作り出したりまでしなくてもよいかもしれない。また、高齢者がベンチに座るだけでなく、ベンチに座っている学校帰りの子どもたちと話すことが楽しいということもある。

(3) Q: トヨタのまちづくりについて何か言いたいことはあるか。

A: 最先端の移動用ヴィークルと仕組みを使ったスーパーシティであるが、これはこ

れで実行していかなくてはいけないと思う。一人乗りのスクーターのようなものが歩道を走ったり、車道を走っても安全な法規制乗を作ったりする。こういったハイテクな取組がある一方、みちにはベンチがあるだけで助かる人もいると考えている。高機能やハイセンスのデザインでなくても、ベンチの設置、それだけで喜んでもらえる人がたくさんいる。立派なものは広報になるので注力するのは分かるが、そこにばかり目を向けていると、簡単にできるものが進まなかったりすることもある。

(4) Q: 高齢者支援に望むことはあるか。

A: 行政は、この仕組みがあるからこういった支援ができあがる、というように、ひとつのことを「分担」して割り当てることで全体が成り立つというような考え方をしがちである。そうではなくて、高齢者が行きたいところに自由に行けるように支援をするというような、ある意味で本人の意思に委ねるのが、本人に一番喜ばれる支援だと思う。支援「しやすい」という行政の都合ではなく、行きたい時に勝手に行けるというようなまちになっているとよい。

(5) Q: ベンチに座っているとどのようにまちが見えるか。座ること自体も楽しいか。

A: 座っていると、歩いている人の様子を眺めたり、普段見えている風景が変わったりすることがおもしろい。ベンチも場所によって見える風景が違うので、それぞれの生活圏の中で、お気に入りのベンチが見つかるとよいと思う。

(6) Q: 座りやすい場所や環境はどのようなところか。

A: 調査をすると、家や店の前のベンチだと座ってよいかどうかわからない、という声が多い。ビルの壁面で窓や出入口のないようなところだと座っても文句を言われなさそうな場所と感じられるのでそこにベンチがあれば座ってもよいとの声もあるが、それでは寂しい気もする。場所のこともあるが、座ってもよいという印があるとないのとでは全然違う。店の前などや奥まっているところでも、ベンチに印をつけることで座りやすくなる。

6. まとめ

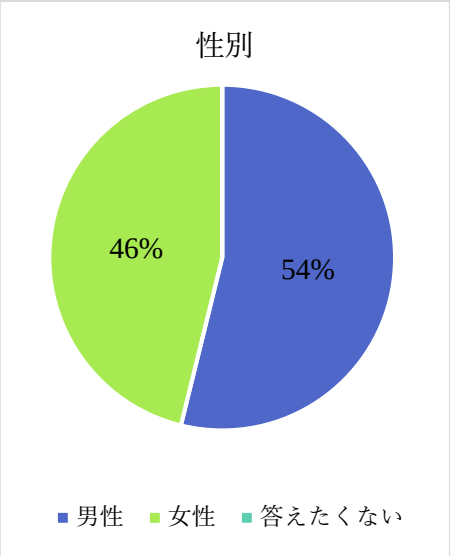
- 高齢者が地域に多く暮らす社会が進展する中、「歩いて暮らせるまち」をつくっていくことは福祉の観点からも重要であり、その第一歩がベンチ設置にある。
- ベンチがあることで高齢者が歩き継げるまちができ、自立した生活ができるようになったり、ベンチが高齢者の居場所づくりとして機能するようになったりする。ベンチがまちにあると生活とまちが変わる。
- ベンチ設置の活動に決まったフォーマットがあるわけではない。いろいろな学区・地

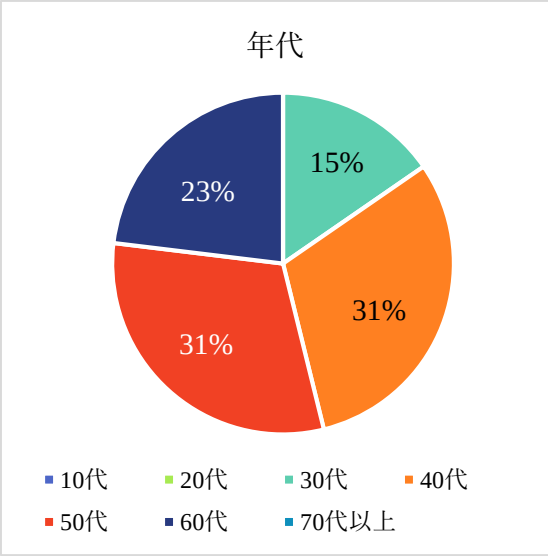
区がそれぞれの方法でベンチの設置を実践することにより、地域がつながってネットワークになり、「歩いて暮らせるまち」ができていく。

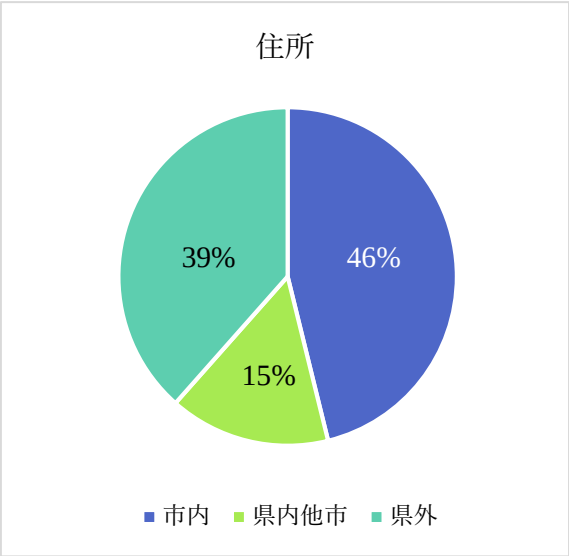
7. アンケートまとめ

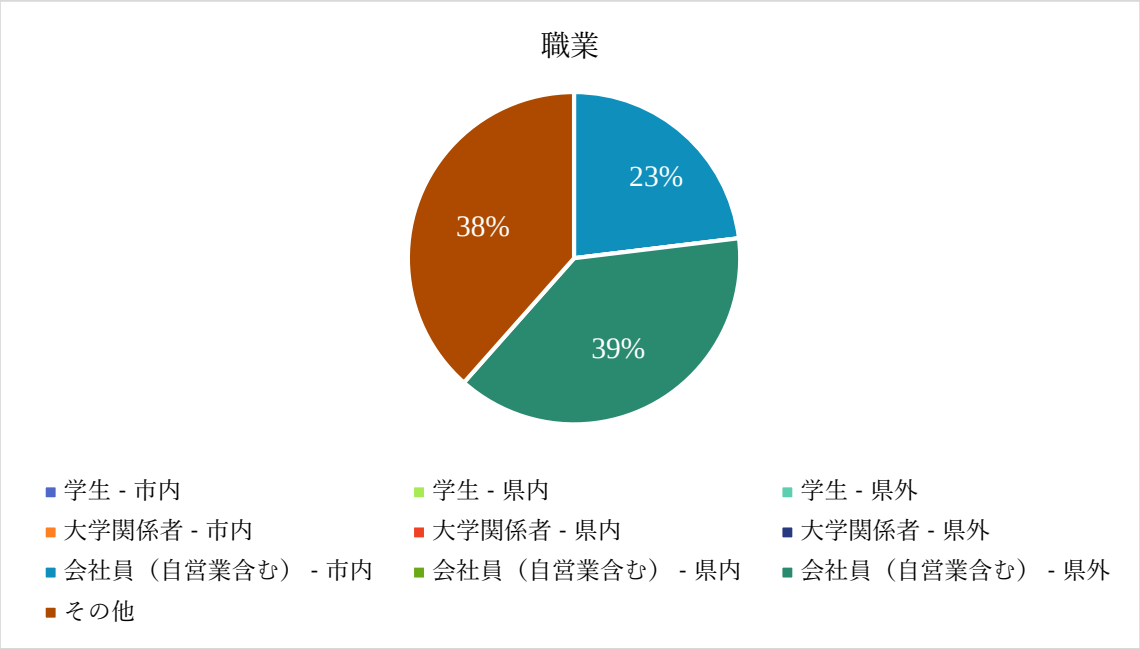
(1) 参加者属性

参加者 28 名のうち、アンケートに回答いただいた方は 13 名、回答率は 46%だった。



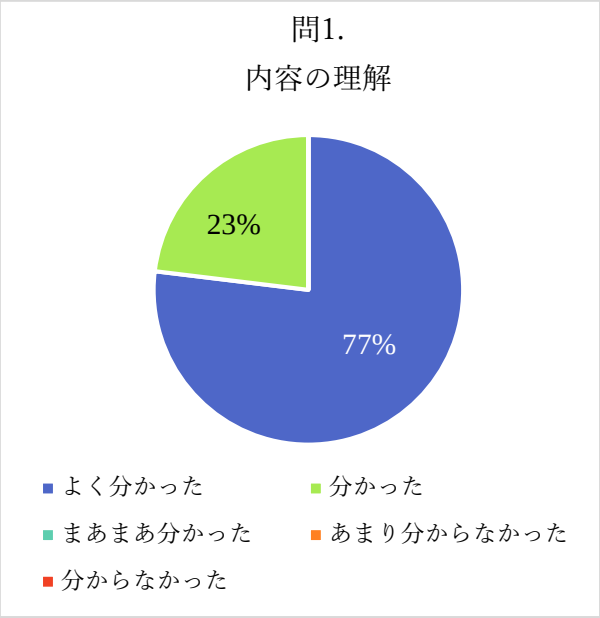


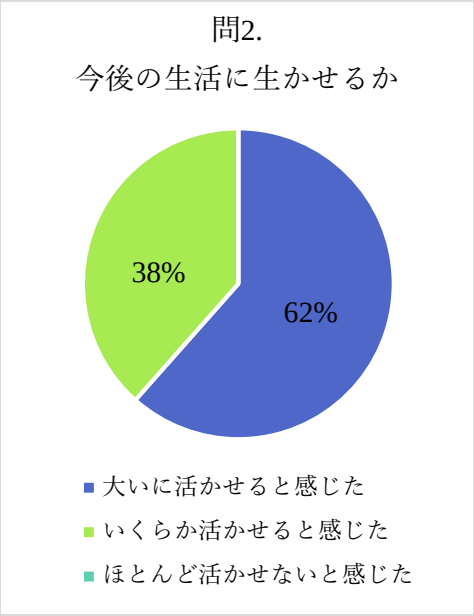


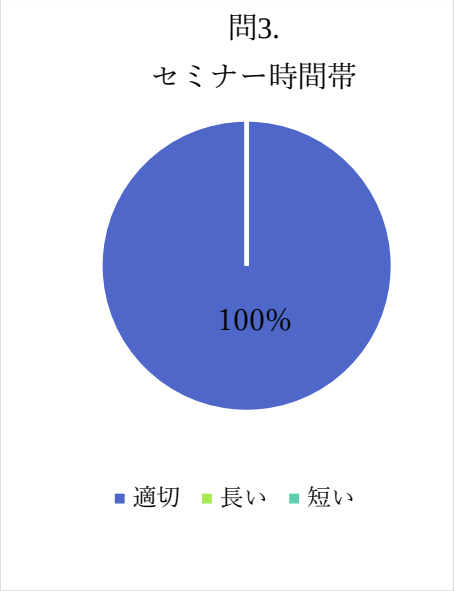

職業
23%
38%
39%
学生 - 市内
学生 - 県内
学生 - 県外
大学関係者 - 市内
大学関係者 - 県内
大学関係者 - 県外
会社員（自営業含む） - 市内
会社員（自営業含む） - 県内
会社員（自営業含む） - 県外
その他

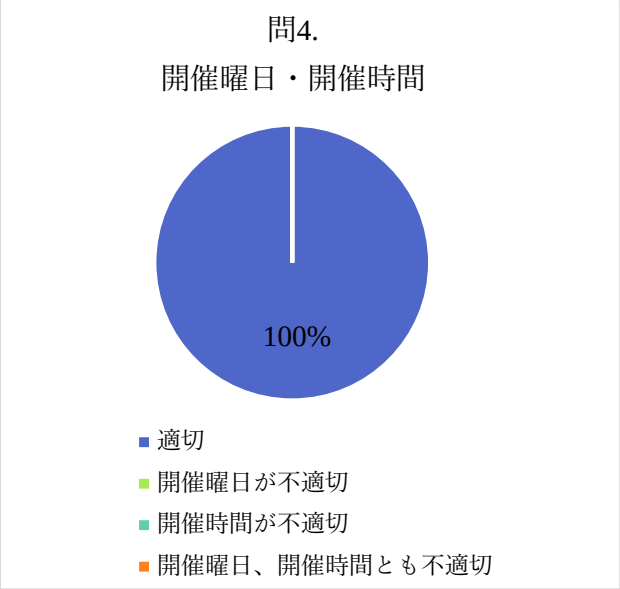
参加方法
8%
92%
オンライン (Zoom)
UDCBKで視聴

(2) 内容について









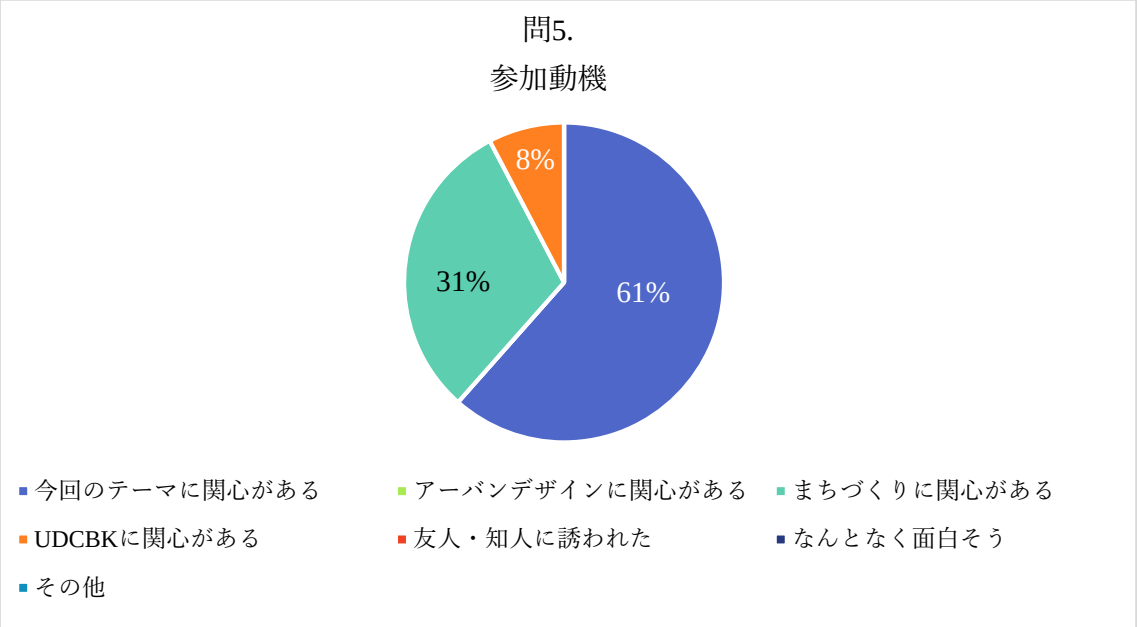
【自由記入欄回答】

問 3. 時間はどうでしたか。

回答なし

問 4. 開催曜日、開催時間は適切でしたか。

回答なし



【自由記入欄回答】

問 6.　それぞれに関心のあるテーマについて御自由に記載ください。

- 外国人も暮らしやすいまちづくり（40 代女性）
- 旧東海道周辺のマンション建設による街並み景観や、まちづくりの住民の意識について（50 代男性）
- 住み続けたいまち草津にするためには、高齢者になってからも生き生きと暮らせるまちであることが大切です。まちづくり、担い手づくり、いかにして人が出会える場をつくるか　これからも色々なテーマでセミナーを期待しています。（50 代女性）
- ・誰かの困りごとや、気づき、優しさが、まちづくりにつながる、その活動をいろいろな組織、年代の方がされているということが分かりました。
  ・アーバンデザインからの、やさしいまちづくりの第 2 回があれば、参加したいです。（40 代女性）
- 地域づくりとりわけ高齢者向けの居場所や介護保険外サービスの積極的な創出（30 代男性）
- ・歩く町のつくりかた
  ・通行を目的とした道路の中で、たたずむための施設であるベンチは法律や制度上でどのように位置づけるのか。、都市生活におけるゆとりの空間としての公共空間の役割と利用の仕方（60 代男性）
- 市民の居場所つくり（50 代女性）

【自由記入欄回答】
問 7. 今回、印象に残ったこととその理由をお聞かせください。

- 残念ながら、所用でセミナーの時間に間に合わず、質問からの参加になりましたが、みなさんの質問と先生の応答を聞いていて、とても興味深い内容だったことがわかりました。京都は、私の生まれ育った街なので、町家とベンチの話とても聞きたかったです。（40 代女性）
- 様々な地域での活動の様子が、それぞれ違った形で広がっていたこと、が印象に残っている。理由は 2 つで、1 つは、自分自身が歩くことが辛くなってきているので、実感があるテーマであり、以前 UDCBK での吉田先生のお話を興味深く、聞かせていただいていたから。もう 1 つは、その際、今自分が住んでいる場所を考えたとき、難しいと感じたが、今回、地域、地域で、取り組みも過程も、その町ごとに違った形が出来上がっていくのを、伺えたから。（60 代女性）
- 国内各地に少しづつ広がる小さな空間からまちが変わる可能性を感じた、具体的な地域の活動事例があり、わかりやすかった。地元でも取り組む方法を考えていきたい。（50 代男性）
- 「日本に基本的インフラ、ベンチと公衆トイレが足りない！」これからそういう地図が必要になると思いました。車いすを利用される方が草津駅近辺の車いすで利用できるトイレの地図を作られましたが、そういう地図があちこちの地域で必要です。あと人づくりについてどっぷり誰かが役を引き受けないと回らない組織ではなく「時々行けばよい」くらいの活動が継続しやすいですね。ありがとうございました。（50 代女性）
- 吉田先生の講義を聞かせて頂き、高齢者支援に活かせる気づきを多く頂きました。散歩するにも、何か楽しみや、目標、目的がいること、ただ歩くということではなく、その目的地に行くことで、何かを得られる、今日はあそこまで行けた等の達成感があれば、継続できる。介護保険では、自立支援を基本としていますが、何メートル歩けるようなるとの目標は立てますが、今後は、何メール歩いて、〇〇が出来る（サロンまで行ける、あの公園まで行ける等)、楽しみが持てる目標を一緒に考えていきたいと思います。「おでかけベンチ」のように、前向きな明るい目標が、地域にたくさんあればなぁと思います。（40 代女性）
- キーワードはワクワクドキドキ。少なくとも担い手（運営者側）がこのキーワードを持たずに動き始めると、そこにはだれも寄ってこない。（30 代男性）
- まちの中の空間に人々が出てきて一定の時間過ごす仕組みを、ベンチといった形で実現しているのが面白い。車利用が進むにつれ、まち中に人がいないまちが多い中で、面白い取組と感じた。ただ、地域に関係のない不審者や来街者がベンチに座っていることもあり得ることに対して、地域コミュニティとしてどのように対処しているの

か気になる。ベンチの設置が進むにつれて地域コミュニティがどのように変化していくのかぜひ、観察してもらいたい。（60 代男性）

- ベンチをおくことで、居場所つくりとなりコミュニティとなることが理解できた。草津市もチャレンジしてほしいと思った。ありがとうございました。（50 代女性）
- 福祉に建築の要素を取り入れるのは斬新でした。建築や土木だけの視点では、介護予防について考える機会がないと思いますし、今回のセミナーのように、他分野をミックスさせることは本当に必要だと思います。これからも UDCBK のセミナーに期待しています!!（30 代男性）